Save The Tropical Forests

ウーターン

Hutan

123

森の通信　2016. 12. 20

密猟のオランウータンを保護するパウリヌス君、他のオランウータン保護センターのメンバー　写真提供:Centre for Orangutan Protection(C.O.P)

CONTENTS

・People(42)Basuki 氏と理恵さん・・・・・・・・・・・p3
・神々の宿る山、人々に守られる山・・・・・p4～p5
・若者へのインタビューから・・・・・・・・・・・p6～p8
・アブラヤシ農園における労働者の人権侵害・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p9～p10
・ベテランに学ぶ学習会より・・・・・・・・・・・p11～p12
・これでよいのかITTO・・・・・・・・・・・・・・・p13
・RSPO ジャパン・デー・・・・・・・・・・・・・・p14
・温暖化防止COP22・・・・・・・・・・・p15～p16
・読書案内『里山資本主義』など・・・・・ p17
・世界の森林ニュース・・・・・・・・・・・・・・・・p18
・会員から・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p19

Save The Tropical Forests
ウータン
Hutan
森 の 通 信
2016. 12. 20
123

今回急遽、石崎事務局長が体調不良になりピンチ・ライターだ。私も「違法ラミン・キャンペーン」実施の際に、数えたら 30 日ほど寝ていないことを後で確認した。今考えると、全く Crazy だ、、。振り返ると、ウータンの活動が楽しかったから、続いたのだろう。社会的活動という意味と、自己をそこにかけて挑戦する意味がある。

ウータンの活動は、少々無理な状況でも打開できると判断したら、こじ開けて活動を拡げる。成果は後からついてくるから。キャンペーンの時に「やれば出来る！」と自らに命じたこともある。自分たちを信じること、仲間を信じることから活動を続けることが出来る。だが、先が直ぐに見えない場合は、「失敗も糧になる」と考える余裕が必要。そのために調査や現地での話し合い、確認作業を積み重ねていくことが重要と思う。多くの事例を知っていたら、急がずに次に何をしたら良いか、その時の次に良い方法が見えるのではないか。

「違法ラミン・キャンペーン」の停止の事例だが、企業とアポなしで話し合うこともあった。突然、やって行ったので企業がラミン材の使用を停止することにも繋がった。人が見て、とんでもない方法がうまく行くケースもあった。不測の事態にどうするかだ。一番必要なのは、各種のデータを手に入れるか、ある程度の悪い予測も知っておくこと。突然の場合も、それに対応することが出来る、不測の事態を予想出来る。この逆が「とんでもない方法」が成功する例。これは逆転の発想だが、正面から向かうことが、本当は一番強い力になる。

自分たちはこれが上手くいくと判断したら、少々のことでも諦めないで遂行する。少し方向が違ったら、修正して再度取り組むこと。初めから全てその道が見えている訳でもない。8 割が見えると真っ直ぐ実施する。2007 年 1-2 月、佐久間さんがサラワク州セマタンで違法貿易の見張りをして「違法材は殆ど見られない」の報告や、中村さんがパンカランブン木材市場で「ラミン材販売したら、逮捕されると言うてます」との報告があった。Telapak・Yayat 氏と連絡し、「ひょっとしたら違法材停止宣言も出来る・・・」と話した。100%確証出来なくても、可能性が高い時は強く宣伝し、「後 2-3 年で違法ラミンはなくなる」と言い切った。行動と分析と、その後の行動で実証できた。ハッタリも時には必要。自分達にハッタリをかけ鼓舞した。だが、先が見えないときは急がないことだ。急げば、確認できていない人を巻き込むことになり、混乱を来す。その時は確認が先で、情報共有と分析が重要だ。だが、時間がない場合どうするか？・・・出来る範囲を決める。出来ない場合の事後策を検討して、それがいつまで可能か詰める。打開策なしは他に何かできるか確認して、停止することも決める。その例が「ウリン保護キャンペーン」だった。勢いでだけで実施の失敗もあるが、反省点を学ぶことだろう。来年は、ウータンの各自の位置とすべきこと・したいことを明らかにして取組むこと。それがストレスのない楽しい活動だ。(西岡)

【ウータン活動記録】

2016・9・3　[World Expo]参加＊武田、西岡
9・20　コープ神戸で講演＊石崎
9・21-26　インドネシア・タンジュン・プティンへ石崎
9・27　RSPO・Japan 東京に参加＊石崎、武田
9・29-30　「アブラヤシ・パーム油戦略会議」に石崎参加
10・6　エコツアー感想会・龍谷大説明会で講演＊石崎、藤原
10・9　「ウータン・ベテランに学ぶ学習会・違法ラミン材ラミン停止へ」講師＊奥村、西岡
8・2 -10・31　近藤、タンジュン・プティン公園や他の中カリマンタン回り、帰国
10・22−11・2　石崎、タンジュン・プティン公園へ。11・1 日インドネシア環境林業省火災総責任者・R 氏と面談
11・3　「アブラヤシ工場等現地見学会」泉佐野、岸和田、泉北コンビナートへ 11 名/案内講師＊西岡
11・7－9　国際熱帯木材機関第 52 回理事会へ参加＊西岡
11・12　シニア自然大学で講演＊石崎
11・15　「「ウータン・ベテランに学ぶ学習会・資料の入手方法・整理」講師＊神前

People(42) Basuki 氏と理恵さん

—どちらも Tanjung Puting 公園生まれでないが、森を愛するタンジュン・プティン育ち。再挑戦だ！

（ジュルンブンの森を守ったと説明するバスキ氏[左]と燃え朽ちた泥炭湿地帯の森を撮影する理恵さん）

Photo・文/ Badman Nishioka

2015 年、私たちが 2010 年から支援していた Friends of the National Parks Foundation たちや村人たちが植えたタンジュン・プティン国立公園の森が燃えた。アブラヤシ開発地で火災が消し止められず、ジュルンブンの森が、泥炭湿地の森が燃えた。9 月 19 日、消火作業を私も手伝うが泥炭湿地の火災は底からまた火が付き、何度も何度も同じところに泥水をかける。既にもはや、きれいな水で鎮火出来ない。水がないから池を再度 6m 掘るも水がなくなる。シャベルや鍬で土の中を掘り返し、泥炭の底に火がないかを確認しながらの消火作業だった。ここで約 1 か月、公園内のブグル地区も 1 か月燃えた。FNPF のメンバーが植えた 250ha のうち 90ha が火災に遭う。「6 月から 11 月まで乾燥して、こんなに雨が降らない年はない。火災の原因は雨が降らないことと、火災を企業が放置していたことだ。アブラヤシ開発企業はこれ以上開発しないと明言することだ。私たちは違法伐採されたり劣化した森を復元するために植林したが、火災に勝てない。ジュルンブン地区では必死の消火活動で、随分森を残した。この香木になる重要な森をも守った。この香木は貴重だ。今、この周りに植林活動を強化して、子どもたちが森を拡げる場を作りたい」とバスキ氏が言う。理恵さんが言う。「私の植えた木も残ったのよ！バスキ！記録も大事よ。」火災に遭ったが、違う夢が見えたのだ。萌芽と再生…。夢を実現するチャンスだ。1 年で他の焼けた木々は 1.5-3m に成長しだした。ミツバチが舞う。花を咲かせ、実をつけだすのは 2-3 年目か。9 年再植林すれば、また野生のオランウータンが色んな実を求めてやってくるだろう。長い夢だ。

神々の宿る山、人々に守られる山、人々を守る自然

近藤美沙子

「はあぁ〜、やっぱ山は落ち着く〜 …！」
上下左右にうねる道を飛び跳ねるように走る車の中で、顔面をきる風の涼しさに安堵のため息をついた。
行けども行けども、緑で覆われた山しか見えない景色。
ときどき眼下に現れる、透きとおった清流。
同じカリマンタンと言えど、海側のジャングルとはわけが違う。
森は好きだが、「私はやっぱ”山派”やなぁ」と、いつもの（平地に広がる）タンジュン・プティン国立公園や周辺地域の森と、つい比較してしまった。
ここは、中央カリマンタン州ラマンドゥ県デラン郡クダンガン村。ボルネオ島の「先住民」と呼ばれるダヤック族に守られているため、いまだに原生林が残り、企業による大規模なアブラヤシ農園および鉱山の開発が禁止されている地域だ。そういった背景をクダガン村のアダット（慣習法）の長（おさ）から聞きながらドライブしていると、目の前に広がる光景は「神々の宿る山」と呼ぶにふさわしいような気がしてくる。

2016年10月8日。私がクダガン村、そして（先述の）アダット長・ヤマハさんと出会ったのは、そこに残る伝統建築を見に行く日本人の方のアテンド（通訳）のために訪れたからだった。案内をしてくれたヨフィーは、主にタンジュン・プティン国立公園エリアでの観光業を営んでいるが、ここラマンドゥ県にも人脈があり、時々ツーリストを連れてきている。地域のリーダーであり、教師をする傍らローカルの観光業も担っているヤマハさんは、ヨフィーとのつながりから知り合った。そして10月末、別件の撮影のためカリマンタンに滞在していたドキュメンタリー映画監督の中井信介氏に依頼し、ヤマハさんへのインタビューとクダガン村の自然や生活の撮影をすることとなった。

（左）デラン郡にある山でのトレッキング風景 （右）家財道具をフル活用してインタビューを受けるヤマハ氏

私がこの土地に惹かれたのは、単に山が好きでここの環境が心地良かったからだけでなく、その背景に存在するヤマハさんのような人材と、彼らが森を守ってきたストーリーを知ったからだ。デラン郡は、初めてアブラヤシ企業がこの地域に進出しようとした1983年からすでに、アブラヤシと鉱山の開発を拒否する運動を始め、85年には正式に郡としての決定となった。当時中学生だったヤマハさんもそのストーリーを熟知しており、精神を受け継いでいる。彼らがこの2つの開発を拒否している主な理由は①水源の保護、②土壌劣化の防止、③自分たちの土地で被雇用者に成り下がりたくない、というものだ。また、ヤマハさん曰く代わりに力を入れたいのは、以前から続くゴムや果樹の栽培・販売と、新たな収入源としての観光業。これらは、大きな環境破壊をすることなく地域の自然を　そのまま活かしてできるビジネスだからだ。特に、観光業については「バリのようになりたい」と熱く語るヤマハさん。クダガン村は、最寄りの空港が車で4–５時間かかるパンカランブンにあるというアクセスの不利に加えて、言語面・設備面からしても、旅慣れしたツーリストに以外にはオススメしにくい場所ではある。しかし逆に、観光地に疲れた人にとっては特別なリゾートとなり得るのでは…と、内心思う。

今回行ったヤマハさんへのインタビューは、紙面では紹介しきれないくらい大ボリューム・濃い内容となった。上映の機会については全く未定だが（自主企画のため、ビデオ編集や上映の企画は中井氏や私たちの空き時間に限られてしまう）ご関心のある方がいらっしゃれば、対面やウータンへの問い合わせ等でお声を寄せていただければ幸いだ。今回撮影をした内容は、①ヤマハさんのライフ・ヒストリー（学校教育から文化振興、観光業の推進、そしてアダット長として多様な経歴を持つ）、②焼畑農業やそれに伴う地域のしきたり・大事にしている伝統や考え方、③デラン郡での大規模開発の拒否の経緯、④環境の破壊を伴わない地域の発展のビジョンやそれにかける想い、といったものである。2日間の観光とインタビューにつきっきりで付き合ってくれたヤマハさんへは、感謝を伝えきれない。また、ホームステイ、トレッキング、食事等でお世話になった地域の人のホスピタリティーに感謝！最後に、クダガン村に連れてきてくれたガイド・ヨフィとの出会いに祝！

（左）トレッキングで訪れた滝の前にて記念撮影

（右）ヤマハ氏に案内してもらった焼畑にて

村人の生い立ちから見つめる、カリマンタンの生活

近藤美沙子

2016年8〜10月の3ヶ月間、クマイの町[1]とタンジュン・ハラパン村[2]を往復しながら暮らした私。ここでは、滞在中に交流を深めていった仲間たちの生い立ちなどから、村の生活を見つめます。以下にご紹介するのは、インタビューをもとにまとめた、2人の若者のライフ・ヒストリーです。

【イサム】

◆プロフィール
31歳で2児の父親。娘は離婚した元妻に引き取られたため、現在は4歳の息子とともに職場であるジュルンブンに住む。タンジュン・ハラパン村で生まれ育った彼には、村に住む母親と高校生になる弟がおり、息子を実家に預けることもある。他のNGOで働いていた頃に有機農業を学び、その後一時期は独立して農業に挑戦していた経験から、ジュルンブンでは有機農業のプロジェクトを担当している。

◆自給自足だった村の生活
小さい頃の生活は、ほとんど自給自足。父親は農業以外に仕事を持たず、米から野菜まで色んな作物を育てていたため、子どもの頃から農業に親しみを持っていた。当時、タンジュン・ハラパンには道路が通っておらず、クマイに行くには川を下るしかなかった。それも、2年に1度くらいのことで、服などの生活用品や、食用油など村で手に入りにくい品物を買うためだった。それでも、油はストックがなくなれば家で採れるココナツの実から作ったし、日常生活に必要な物は村で手に入った。1996年に米の不作に見舞われたさいにも、その後半年は代わりにキャッサバを食べ続けた。

◆農業を諦め、違法伐採へ
1997年の大洪水で米が全滅したあと、タンジュン・プティン国立公園敷地内での木材伐採の仕事を聞きつけて、兄と2人で違法伐採の仕事を始めた。当時は村全体が違法伐採で沸いていて、男女構わず、働ける人は誰しもが伐採の仕事をしていたように思う。最初の仕事で得たお金は今でも覚えている。オランウータンの絵が描かれた500ルピア札でいっぱいになった袋を受け取り、中には全部で9万ルピア入っていた。当時としてはかなりの額だった。

◆FNPF入職は父親の勧め
FNPFで働き始めたのは、2004年のこと。FNPF[3]の活動の一環でバティック染料にする木を植えるボランティアをしていた父親は、FNPFスタッフから「あなたはもう長い間ボランティアとして働いてくれた。あなたの子どもの中にスタッフになりたい子はいるか？」と聞かれたらしく、「違法伐採をやめてFNPFで働いたらどうだ？」と声をかけてくれた。月給は4万ルピアと違法伐採での収入より少なかったものの、違法伐採がしにくくなっていたことから入職した。

---

[1] 中央カリマンタン州にあるタンジュン・プティン国立公園へのジャングル・クルーズはこの港町から出発。後述のタンジュン・ハラパン村からバイクと渡し舟で1時間弱。村人が日用品をまとめ買いする最寄りの街。

[2] タンジュン・プティン国立公園の境界線にあたるセコニャール川を挟んで、公園の対岸に位置する村。

[3] Friends of National Parks Foundation。ウータンが支援するインドネシアNGOで森林再生等に取り組む。

◆FNPFの資金難、転職、そして再入職
タンジュン・プティン国立公園内での植林やオランウータンのプログラムなどに取り組んだあと、2008年には団体の資金難を受けて全員がジュルンブン[4]に活動地を移し、仕事と給料が限られるようになった。月に5日間しか仕事がなく、シフト制で苗木の世話をした。月給は6万ルピアから3万5千ルピアにカット。残りの25日間をつかって農業をすることで自主的に稼ぎを探さないといけなかった。2008年7月からOFUK[5]に引き抜かれて、7人の部下を従えるマネージャーの職についた。FNPFより高給だったが、事務所で報告書を作る時間が長く、性に合わなないと感じた。現場で実際に鍬を握って仕事をする方が好きなんだ。それに、「マネージャー」という肩書きも好きじゃない。OFUKの有機農業プログラムで専門家から堆肥づくりなどを学ぶ機会があり興味を持ったので、2011年に辞めた後は1年間自営農業を試してみた。その時バスキが家に遊びに来て、FNPFに戻るよう誘われ、ジュルンブンでの有機農業を担当することとなった。

◆有機農業にこめる、地域への希望
農業は、ほんとは誰にだってできる仕事だと思う。鍬を持って土を耕せばいいんだ。自分は一人でこういう作業をすることが性に合っているから、今の仕事が好きだ。タンジュン・ハラパン村でも、そしてここジュルンブンでも、アブラヤシのビジネスに関わる人が増えてきた。ジュルンブンでは、企業のアブラヤシ農園（およびそれに伴う水路）ができてから湿地が枯れてしまい、毎年水不足で苦労する。今もアブラヤシを植え始めた農家が水路を掘ろうとしているので、反対している。大きな声でアブラヤシ反対を主張することはできないが、このように農業をしている自分の姿を見せることで、少しずつ地域の人の考え方が変わることを願っている。

【フェブリ】

◆プロフィール
推定21歳（生まれた年について正確な情報がない）。タンジュン・ハラパン村で生まれたものの、就学年齢になった時点でクマイに引っ越す。最近になって、両親と小さな双子の弟はタンジュン・ハラパンに戻ったものの、彼自身は村やクマイ、職場やFNPF事務所などを行ったり来たりする生活をしている。2015年半ばにFNPF事務所に通いだしてから英語に磨きをかけ、2016年の観光シーズンにはガイドの仕事を始めた。FNPFの植林や環境教育にも頻繁に参加する。

◆幼少期の村の生活
村に住んでいた頃（本人曰く、1995年頃から2002～2004年までの間）にはまだ道路がなく、もちろんバイクを持っている人もいなかった。クマイへ行くには船。電気は個人用の発電機を持っている家が一軒あっただけで、その家にみんなで集まって白黒テレビをみていた。川の水はまだキャンプ・リーキー（上流にあるオランウータン保護施設）のような透き通った黒色をしていて、今のような（砂の混じった）茶色ではなかった。

---

[4] タンジュン・ハラパン村からセコニャール川を1時間ほど上ったところにある（あるいはバイクで1時間）。もともとは泥炭湿地林が広がり、一部の村人が農業や漁業を営んでいたが、違法伐採・火災・アブラヤシ農園の拡大などで森林が減っている。FNPFの活動地の一つで、植林・有機農業・環境教育などを実施している。

[5] Orangutan Foundation UKの略称。イギリスに本部を置くNGOで、主にオランウータン保護に取り組む。

◆学校は合わず、色んな仕事を渡り歩いた
当時村には小学校はあったものの、クマイに引っ越したためその後は中学までクマイの学校に通う。小学校では1年留年したため合計7年かけて卒業、中学校は1年半通ったあとに中退。学校を辞めてからは国立公園で1ヶ月間勤め、その後は好奇心から父親の金採掘を手伝う生活をする。パーム油企業でアブラヤシ苗木の世話をする仕事を1年間したこともあるが、それを辞めてからは建設現場や観光船での雑用係、また植樹などの仕事を渡り歩き、今年になってガイドを始めるまでは2年間ほど無職の状態だった。（ちなみに父親は、以前村に住んでいた頃は国立公園内での違法伐採に従事し、クマイでは金の採掘、そして現在は村からアブラヤシ農園に勤めて生計を立てている。）

◆英語嫌いな過去と英語で変わった自分
小学生の頃から英語の成績がずーっと悪くて、中学生になっても英語はまったくダメ。英語の授業では、先生が何かを説明してる間はずっと寝ているありさま。「とにかく、英語についてはおかしいほどに全くやる気が起こらなかった。英語の授業になると寝て、起きたら顔に落書きがいっぱい。ほんとにやんちゃだったから、中学時代の面白い話はいっぱいあるよ。」と本人談。英語に興味を持ち出したのは、FNPFに関わるようになってから。FNPF事務所で外国人ボランティアと知り合うものの、彼らが何を言ってるか分からない。友達が彼らと喋っている姿を見て、勉強するようになったとのこと。英会話教室に通うガイドも多くいるが、彼自身は独学を続けている。本を沢山読んだり、他人が英語で喋る姿を観察したり、英語の音楽を聴いたりすることを通して学んでいる。

◆植林活動のきっかけは2015年の大火災
以前にも植林をしたことはあったけど、まじめにするようになったのはFNPFに関わり始めてから。昨年10月FNPFの消火活動に加わって以来、その後の再植林にも積極的に参加している。今はガイドとしてお客さんを案内する際、火災や植林の話も必ずしている。スマホを持ち歩いているから、相手に信じてもらえるように写真や動画を見せながら説明するそう。この間、「僕の趣味の一つは植林なんだ。僕自身の未来のためにも、動物たちの未来のためにも（植林をしている）。森は、僕の人生の一部なんだ」と話したら、それを聞いたお客さんが「自分も植えたい」と言ってくれた。

◆村人にだって「できる」ことを証明したい！
「英語がもっと向上してもう少し成功したら、村の人たちの魂を目覚めさせたいと思っているんだ。タンジュン・ハラパンの村人にだって『できる！』ってことを証明したいんだ。ずっとこのまま鑑賞者でいるだけだとダメなんだ。観光客を村に案内する僕の姿をみて、他の村人にも英語の勉強にやる気を出してほしい。ここは国立公園（の対岸）にある村で『観光の村』なんだよ！そこの人たちが、クマイやパンカランブン[6]のガイドみたいになれないなんてありえないだろ！…そういえばこの間、ヘンディ（村に住む中学3年生）が僕に『英語の本を貸して』って言ってきたんだ。すっごい嬉しかったよ。僕を見てインスピレーションを受けた人間がいるという証拠だから。」

★後記：フェブリのインタビュー後半を横で聞いていたナシブ（FNPFスタッフ・オペックの弟。17歳で学校や仕事もなくブラブラしている状態で、時々FNPFの雑用を手伝ったりしている）が、終わった後に私を港に送ってくれる道中、「僕もフェブリみたいになりたい。昔はやんちゃだった人が今は英語が喋れるようになってガイドをしてるなんて、かっこいい。」と漏らした。

---

[6] クマイに隣接する街。王宮の残る場所で昔の「都」としての顔を持つ一方で、中央カリマンタン州西部のなかでは経済の中心地でもある。ジャカルタからの飛行機が着く空港があるため、タンジュン・プティン国立公園を訪れる観光客にとっては玄関口となっている。

アブラヤシ農園における労働者の人権侵害

神前進一

近年，消費者の関心の高まりを受け，パーム油業界では NDPE（No Deforestation, No Peat, No Exploitation）や conflict free，ethical palm oil を表明する企業が相次いでいる。アブラヤシ生産に伴う森林や泥炭地破壊は外から目に見える形で監視できるのに対し，農園内での労働搾取の実態は見えづらく，これまで大きな論点とはなってこなかった。ハラパン村での経験でも，BLP 社のプランテーションの移住労働者は身分証を取り上げられ外部への移動の自由が奪われていると聞いたり，BGA 社の農園で働く村人が規定に反し防護服なしで農薬散布をしているのを見たりした程度であった。ところが昨年来，マレーシアとインドネシアで相次いで両国を代表するアブラヤシ農園での労働搾取の実態が告発され，いずれも RSPO の苦情パネルで認証停止を視野に入れたやり取りが進行中である。

ASM 社のアブラヤシ農園で日雇いの農薬散布の作業休憩中のハラパン村住民
日給 9 万ルピア，防護具の使用を促す看板がある　（2016 年 2 月神前撮影）

FELDA プランテーションでの外国人労働者

人口 3 千万人のマレーシアでは 210 万人の登録外国人労働者と 170 万人の違法外国人が働いていると推定され，アブラヤシ農園部門では労働者の 77%が外国人との公式統計がある。今年 2 月に政府は 150 万人のバングラデシュ人労働者を受け入れる覚え書に調印したが，批判の高まりで一時的に受け入れを凍結した。2015 年 7 月 26 日付 Wall Street Journal 紙はマレーシアの FELDA/FGV 農園でのバングラデシュ人労働者の人身売買と搾取を記事にした。バングラデシュ北部出身の 22 歳の若者 Rubel は以下のように語る。仕事を探していた彼は，海外のプランテーションで良い収入になる仕事があると業者に誘われ，10 月のある晩 3 人の友人とベンガル湾沿いの港町に向い，長さ 12mの木造船に 200 人ほどのバングラ人やミャンマーのロヒンギャ難民と詰め込まれた。この人身売買業者は払われる給料から 16 万タカ（約 2000 ドル）を渡航費と手数料として差し引くといった。3 週間かけてベンガル湾を渡る間，食料や水も十分に与えられずトイレに行くことも不自由で，暑さの中で命を落とす者が続出し，遺体は海に投げ捨てられるのを見た。タイ南部の海岸に着いた彼らは鉄条網の中のキャンプに押し込まれ，他人の手足と絡みあいながら眠った。その業者は一人ずつ呼び出しては故郷の両親に電話をかけ，叩いて悲鳴を聞かせ身柄解放と引き換えに金を要求した。彼の両親に電話し，殺してジャングルに埋めると脅した。父親は仕方なく土地を売って 2500 ドルを業者に払った。その後，Rubel らは何日もジャングルを歩かされマレーシア領内に入った地点で別の工作員に引き渡された。最終的に半島南部の Jempol に連れて行かれ，労働請負業者のもとで雇われ FELDA プランテーションで働くことになった。

FELDA は連邦土地開発庁という名称の示すように 1950 年代にマレー人貧困層をゴムやアブラヤシ栽培農民として入植させるための連邦機関として出発した。現在では FGV（Felda Global Ventures）として直営アブラヤシ農園や精製・流通・油脂化学工業までも手掛けるマレーシア最大のパーム油総合事業者に成長した。アブラヤシ生産の 4 割を 11 万人に及ぶ入植者が占めるが，3 割を占める直営プランテーションの労働者は 85%が外国人で，直接雇用の場合と Rubel のような間接雇用の場合がある。

労働請負業者の場合，給与の支払い控除やパスポートの没収などは普通であるという。「彼らは私たちを家畜のように売り買いする」と，全く給与を支払われないまま 6 か月間で 3 つの業者の下で働いた

別のバングラ人の若者は語る。店から遠く離れた森の中の小屋に住まわされ，請負業者から意図的に高い値ですべてのものを買わねばならない生活で借金が膨らむ。ある請負業者は金曜午後の礼拝に 1 時間仕事を離れただけで 30%も給料を差し引いたという。こうした状況に対し，労働者はパスポートを取り上げられているため，逃げることも，窮状を訴えることもできない。最低賃金は月 900 リンギ（240 ドル）であるが，多くの労働者は月に 26 日働く最低基準を満たす仕事を現場監督から与えてもらえず雨で仕事ができず，700～800 リンギになればよいと言う。Rubel は請負業者が理由も言わずにこれまでの賃金をすべて差し押さえているが，これは請負業者が人身売買業者にリクルート費用を払うためと聞かされている。彼は違法労働が発覚して警察に逮捕されることを恐れて賃金不払いに抗議できなかったが，長く働けばやがて賃金が払われると信じている。彼の仕事は除草剤の散布で，防護服を与えられて作業しているが，作業の安全訓練は受けておらず，毒性が強く EU 等で禁止されているパラコートも含まれるという。危険な作業の多いアブラヤシ農園での作業で事故が起きた場合，FELDA 直接雇用の労働者でさえ補償がなされず，事故後に無収入となった労働者もいるという。

このようにマレーシアのアブラヤシ生産は外国人労働者により支えられており，国際的な人身売買を伴う労働者の人権侵害が蔓延している。米国政府の「人身売買に関する年次報告（2014）」でマレーシアは最も低いランクに位置付けられ，米国労働省の「児童労働・人身売買への関与が認められる産品リスト」で 2010 年以来マレーシア産パーム油が指定され，改善が勧告されてきたが問題は根深い。

IndoAgri 社プランテーションでの労働実態

Indofood 社はサリム財閥が所有するインドネシア最大の食品・パーム油企業で，世界最大のスナックや飲料製造企業の PepsiCo 社と合弁関係にもある。Indofood 社のプランテーション部門 Indofood Agri Resource（IndoAgri）社の子会社 London Sumatra（LonSum）社の農園での労働者の人権権侵害状況が RAN（Rainforest Action Network），インドネシア労働権連合（OPPUK），国際労働者権利フォーラム（ILRF）の 3NGO の合同調査レポート“The Human Cost of Conflict Palm Oil”により明らかにされた。同社の北スマトラにある RSPO 認証を受けた 2 つのプランテーションで 2015 年 9～10 月に 41 人のさまざまな職種の労働者への聞き取り調査から，以下のような実態が明るみに出た。労働者のほとんどは植民地時代にジャワ島から農園労働者として連れてこられた人々の子孫で，代々プランテーションで働いてきた。アブラヤシ果房の収穫や農薬散布，化学肥料施肥など中心的な仕事を担う多くの労働者は不安定な雇用条件の日雇い労働者，期限付き臨時労働者と位置づけられ，常勤労働者の半分程度の低賃金で，安全具や医療費も労働者の負担となっている。常勤労働者も臨時労働者も地域の定められた最低賃金を下回り，賃金や労働条件についての団体交渉権もない。収穫労働者はノルマを達成して低賃金を補うため，収穫時に果房から離れた実を集めたり果房を道路際まで運び出す作業などに 10 代の少年や妻など家族や親族を補助者（kernet）として間接的に雇うことが広く行われている。Kernet は日給 2～3.5 万ルピア（1.5～2.5 ドル）と極度の低賃金あるいは無給で，防護具の支給や保険は全くなく，会社との雇用関係のない「見えない労働者」である。農薬や化学肥料の散布は主として女性の日雇い労働者が担当し，毒性の強い除草剤パラコートを含む農薬が使用されているが，最低限の防護具しか与えらず，医療保険はなく，プランテーション内の診療所へのアクセスも制限されている。常勤労働者は国際労働法で違法とされている会社支配下の組合への加入が義務付けられ，給与から組合費が差し引かれ，独立労組に加わろうとした者は恫喝を受けたという。

これまでパーム油をめぐる問題はもっぱら環境破壊や野生生物の危機，土地をめぐる地元住民との紛争という側面から議論されてきたが，安いパーム油の背景にはこのような労働搾取が広く存在することを私たち消費者は忘れてはいけない。

2016 年 11 月

ベテランに学ぶ！ボルネオ島の森を守るための情報収集と分析力

ウータンでは今、これまで違法材対策分野等で培ってきたノウハウをベテランから若手へ継承しようと、様々な取組みを始めています。関西地域 NGO 助成プログラムとして認められており、2016 年 8 月～2017 年 3 月まで集中して取り組んでいきます。

ラミン材キャンペーンと違法伐採停止(11 人)

10/9（日）西岡さん宅で主に奥村さんから 2000 年以降 3～4 年にわたる活動の話を聞きました。

最初は問題の全体像を把握してそれに関わる人々について理解していく為、直接現場主義で関係者から徹底的にヒアリング。その際、より多くの正しい情報を得る為に色んな役を演じて怪しまれない様にしていたそうです。また印象的だった話は、税関で希少種が樹種等を偽られて違法に入って来ても、港の検数協会の方々は木材を見て産地や樹種が分かるので正しい情報に書き戻されるという構図があったというもの。

さて、こうして全体像が把握できたら、身近で明確な代替材が提案できるシンボリックなものとして学校のホウキ(柄)をラミンから竹へ！というラミン材キャンペーンが始まりました。ここで重要な事は、規模が小さくても状況を自分の裁量で変えられる人に注目し、その人達にとって不利益でないストーリーを提示していく事のようです。また、理解してくれる協力者を見つけ出し、そこを切り口に一気に切り裂いていくイメージで進めていたことが分かりました。

粘り強く、そして戦略的にキャンペーンが進められていた事を改めて学びました。

港での現地調査(11 人)

11/3（祝木)、4 台の車で泉佐野の不二製油社や岸和田の貯木場跡、泉北の日清オイリオ社周辺(勝手に)見学を行いました。泉佐野では周辺で釣りをされている方々からヒアリング。この日は午前中に大きなタンク船が来ていた事や通常は4～5本のパイプを船のタンクに繋いで一日がかりで港へおろす事、毎日何かしら船が来て止まっている事等を教えていただきました。

行く先々で、「ここは昔…」と当時のエピソードがベテランメンバーの口から溢れ出し、とても楽しく充実した現地調査でした。

夕暮れ時、最後に訪れた日清オイリオ社では私有道へ許可無く入り込んでしまった様で、工場の守衛の方から不審者扱いをされてしまいました（確かに謎の集団でしたね…）。と、そこでもベテランの技がキラリ！工場の中に入るつもりはない事、勝手に入ってはいけないと知らなかったと丁寧に謝るＹさん。そこへ「どないしたん!?」とＮさん。状況を知って謝ったかと思うと、勢いよく「ほんであの油はどっから来てるんですかね？」と驚きの質問返し。拍子抜けした様に「あぁ、あれですか？あれはね…」と答え始めてしまわれるから爆笑ものでした。

Web からの情報収集（9 人）

11/15（火）は、主に神前先生や西岡さんからネットによる情報収集について教わりました。どんな情報入手元サイトがあるか、それぞれの特徴は何かを学びました。エコツアーに参加した学生の方も何人か集まってくれ、賑やかに学びを深める事ができました。

1. Mongabay https://www.mongabay.com/
   見やすくて多分野に渡り情報量も多いおすすめサイト。引用元は論文で、信頼性が高い。
2. Center for International Forestry Research （Cifor） http://www.cifor.org/
   森林問題に特化し、論文をまとめているサイト。文章量が多く読みにくいのが難点。
3. REDD Monitor http://www.redd-monitor.org/
   気候変動と森林に関するニュースを集めたサイト。簡単に元のニュースを辿れる。
4. Rainforest Rescue https://www.rainforest-rescue.org/
   キャンペーンや署名の呼び掛けを行うサイト。
5. WWF International http://wwf.panda.org/wwf_news/
   幅広い分野に関する WWF 研究者の科学的なレポート。
6. World Resources Institute(WRI) http://www.wri.org/
   信頼性の高いデータが豊富に掲載されているサイト。
7. Global Forest Watchhttp://www.globalforestwatch.org/
   森林の状況や変化を可視化したサイト。衛星画像を週に 1 回程の頻度で更新されている。

これでよいのか ITTO!資金使い込みを許すな！第 52 回国際熱帯木材機関（ITTO）理事会

（西岡良夫）

世界の熱帯木材輸入は 1970-1990 年まで日本が中心となっていたが、中国の経済成長と人口増加により 1990-2000 年までは日本と中国が輸入の中心となった。中国の経済成長が著しくなり、**2000-2015 年の熱帯材輸入取引の中心は現在中国である。**違法材が主に運ばれているのも中国で、マレーシア、インドネシアから運ばれていたのが近年で変わり、ミャンマー、ラオス、ナイジェリア、カメルーン、コンゴ等から輸出されている。

熱帯木材の取引を公正にしていくということで ITTO が設立され、日本が資金の 7 割を負担している。輸出入の状況が様変わり、中国等が資金をもっと負担すべき時期でないだろうか。安倍政権の 30 兆円損失の年金と同様にゼ・メカ前事務局長らは、プロジェクト原資を博打債権の範疇外のファンドにつぎ込み、大半となる 600 万ドルを損失した。既に前事務局長は退職し、2 名の幹部を解雇するも最終的に 14 億円を日本が拠出し、返金と体制変革、チエック体制が今後出来ないなら、どう改革していくかITTO は再検討すべきだ。**熱帯木材の違法取引が激減した今、出来ないならITTO の解散を検討すべき。熱帯林は大きく破壊され原生林は僅か 7%未満で、保護区も世界で 15%しかない。森は温暖化防止の役割も大きく、保全か破壊かが問われる。**

＊＊＊　　＊＊＊＊　　＊＊＊＊

＊丸太（Log）　輸出は 10 年前マレーシア、ブラジル等が中心で、輸入は中国、日本が中心であったが、以前の「木くい虫」日本の丸太輸入が激減。日本は製材・合板が主となった。今丸太輸入の大半は中国だ。**2000-2015 年**では中国が中心（例*パプアニューギニアから中国へ 320 万 m3 の輸出）である。**中国は 2010** 年まで急増したが近年は微増。**2 位**インドは 2008 年頃に増加後、近年は微増。3 位ベトナム、4 位が台湾となった。

2015 年の原木輸出は 1 位ミャンマー、2 位カメルーン、3 位コンゴ、4 位ガイアナ、5 位マレーシアとなり、6 位モザンビーグ、7 位ナイジェリア、8 位 PNG と違法伐採・違法貿易停止を進めていない国からの輸出が急増している（例*2014 年ミャンマーは違法材輸出の停止を出すも 2016 年も依然と中国へ大半運ばれる）。中国の輸入先 1 位のラオスが急増し、2 位ミャンマー、3 位ガンビア、4 位ナイジェリアと続く。驚く変化だ。中国が Key だ。

＊製材品（Sawn）　輸出 2010-2015 年、南アメリカ（特にブラジル）では減り、アフリカ諸国からの輸出が増えている。輸出の中心はサラワク州の伐採のほかPNG、ガイアナ等で伐採するマレーシアが 1 位で、近年やや減少、2 位タイは増加（1992 年の植林事業で製品化増、中国に 310 万 m3 輸出）、3 位インドネシアは激減、4 位カメルーンは増加。輸入は 1 位中国、2 位タイ、3 位台湾、4 位 EU、5 位ベトナムと、輸出入もかなり変わる。例えばマレーシアはタイ、中国、フィリピンへ輸出し、アフリカ諸国の輸出はEU、中国。

＊合板（Plywood）　Key は輸入1位中国であり、2位インドネシア、3位マレーシア、4位インド、5位ブラジル、6位エクアドル。

輸出は1位インドネシア、2位マレーシア、3位中国、4位ベトナムとなる。ただしマレーシアから輸出は1位日本、2位韓国、3位USA、4位台湾、5位中国、6位 EU。日本への輸出は 110 万 m3 である。

＊＊＊＊

（写真 ITTO/左・代行スティーブ氏、中・ゲルハルト氏）

52 回理事会は前回クアラルンプールでの理事会で前事務局長らの ITTO 資金回収に結論が出ず、事務局長不在のまま、代行・スティーブ氏、後藤次長が取り仕切るも苦渋の開催だ。

今回の理事会で改めて6名の最終候補者から新事務局長を選出の投票が 3 日間で決まらない。最終的に金銭的疑惑を追及するドイツからゲルハルト・ディターレ氏が協議合意で選出された。今回、51 の活動項目を含む「2 か年事業計画 2015 年－2016 年」の決議案が提案され、理事会で承認された。また調査監視委員会から提出された再発防止、関係者の責任追及と損失処理に係る措置を勧告する報告書に基づく決定案が理事会により承認された。これから劣化の熱帯林をどう保全するかも問われる。

2016 年 11 月

RSPO ジャパン・デー2016

2016 年 9 月 27 日（火）東京国際フォーラムにて、日本初の RSPO 公式となるパーム油シンポジウム『RSPO ジャパン・デー2016』が開催されました。ウータンからは、石崎と私（武田）の 2 人が参加しました。参加者は関係者を含めて 350 人だったとの事です。開催趣旨としては、SDGs(持続可能な開発目標)の流れも踏まえ、「持続可能な原材料の調達」について考えるきっかけとして「パーム油」に焦点を当て、国内外の企業における先進事例に学びながら日本特有の課題共有、共通認識の醸成を図るものとされていました。丸一日掛けて、パネルディスカッションや 3 つの分科会に分かれての説明会等盛り沢山の内容だったと思います。以下いくつか具体的に報告します。

生産者からの事例報告(Daabon Group） http://www.daabonorganic.com/p_shortening.html

コロンビアの生産企業であるダーボン社から、ムービー等を用いての先進事例紹介がありました。大きなタンク車ごと蒸し器に入って行く様子や搾油状況、生産者のワーク・ライフ・バランスにも配慮している事、廃棄物（パーム殻等）を肥料として再利用している事等が紹介されていました。2009 年には大規模なバイオディーゼル工場が操業しているとの事で、エネルギー市場にもパームが確実に参入してきている事が伺えました。

RSPO に参加している企業の事例紹介

ユニリーバ社や西友（Walmart）社、太陽油脂社、コープクリーン社、不二製油社等の話を聞きました。外資系と日本国内企業では少し印象が異なりました。外資系は本部主導で取組み、まず社員の啓発勉強会、次第に取引先へも理解をという戦略性を感じました。短期コストとは別次元の問題として、長期的かつグローバルな視点に立って社会投資だと位置付けているのは良い特徴だと思いました。また、西友社は WWF と勉強会をおこなったり、不二製油社は Wild Asia 等による小規模農家支援プロジェクトに参画したりと、NGO との関わりも興味深かったです。

企業目線での課題

取引量が少ないとクリーンな原料の調達が厳しい現状や、パーム油(特にパーム核油)の価格変動が激しい事等が課題として指摘されていました。

RSPO 事務局長
Darreel 氏

Darrel 氏は WWF 出身

温暖化防止 COP22 と第 1 回「パリ協定」締約国会合 西岡良夫

【昨年より 0.9C 上昇、111 ヶ国、パリ協定合意】
2016 年 11 月 7 日、モロッコ・マラケシュで第 22 回国連気候変動枠組条約（COP22）と第 12 回京都議定書締約国会合（CMP12）が開催された。世界の温室効果ガス排出をゼロにすることを目指す新国際協定「パリ協定」の第 1 回（CMA1）締約国会合も開催された。パリ協定は、温暖化防止締約国会議 COP21 で 2015 年 12 月 12 日に**「パリ合意 Paris Agreement」**採択の多国間協定で「パリ協定」の以下の点が合意に至った。
①今世紀末に平均気温上昇を 2℃未満から 1.5℃に抑える努力すること、
②協定締結国すべてが温室効果ガス削減目標と行動を自主的に定めること、
③目標と行動は 2020 年以降 5 年ごとに提出し更新すること、
④炭素吸収として森林保全と強化に努めること、
⑤先進国が資金を提供することは継続、発展途上国も自主的に資金を提供すること、等だ。

世界は産業革命以前に比べ既に 1℃気温上昇した。昨年の「パリ合意」から今回の COP22 までは、14 カ月も 139 年中の「Hottest」の新記録となり、昨年より 0.9℃気温上昇し気候変動が著しく、世界にとっては大切な会議になった。だから無内容に近いインドも 11 月 2 日「ガンジーDay」に合わせ批准。インドの批准で世界各国の 55 か国以上、合計温室効果ガスの 55%批准条件が満たし、「パリ協定」へ合意となった。インドネシア、韓国、ベトナム、ナイジェリア等が批准し、100 か国になる(最終的に 111 ヶ国)。Google でもパン・ギムン国連総長は「100 か国批准を心から賛同したい。これからの道のりが厳しいが、各国は野心的な新たな政策を打ち出し、行動することを期待」とパリ合意の祝賀会で 11 月 4 日に述べた。

(国連総長)Nishioka Blog より

【国際的感覚を欠く日本、ロードマップ作成を】
日本はどうか?・・安倍政権は TPP を強行採択する方向で[パリ協定合意]を捨て、[協定合意]最終日の 11 月 4 日も TPP 審議を開催し、日本は間に合わず会議に【議決権無のオブザーバー参加】となった。10 月初旬に EU 諸国が EU として批准したことなどにより条件を満たし、[パリ協定]では長期目標も定めている。全ての国・地域が CO2 温暖化ガスの排出を今世紀後半までに「実質ゼロ」にすることを目指すことを基本としている。長期目標を先取りしているドイツは 2050 年までに 80-95% 削減、イギリスは 1990 年比で 80%削減という目標を設定している。先進国が資金面、目標、行動でリードし、途上国も目標、行動をすることで地球全体として取り組む姿勢が明文化された。[協定]となったにも関わらず、日本は石炭、原発推進で、世界から大批判されている。
(写真・風力発電確認するメルケル首相)

昨年 12 月のパリ協定採択後、各国で批准が進んでいるが、やっと日本では 8 日午後、パリ協定に批准する承認案が衆院本会議で可決。政府は批准を閣議決定。日本は[パリ協定]を受けて「2050

年に 80%削減」の長期目標を盛り込んだが、推進のロードマップは全くない。これではザルだ。モロッコの COP22 会議で各種の議論がされ、特に水不足は世界経済や国の安全保障を脅かす恐れと各国の間で広がる。IPCC は「[気候変動に関する政府間パネル]が 2 年前発表の報告書より温暖化が進む。今世紀末に最大で 4.8 度上昇した場合、中南米の一部、北アフリカ等で 2005 年まで比べて降水量が 20-30%ほど減少」という。「干ばつや洪水等の災害で、世界で年に約 2600 万人が貧困状態に陥り、5200 億ドル(約 56 兆円)の経済損失が起きる」との報告書を 11 月 15 日に世界銀行が発表。2018 年会議では、どれだけ削減の努力が進むか問われる。

【歴史的 48 か国 100%再生エネルギー推進】

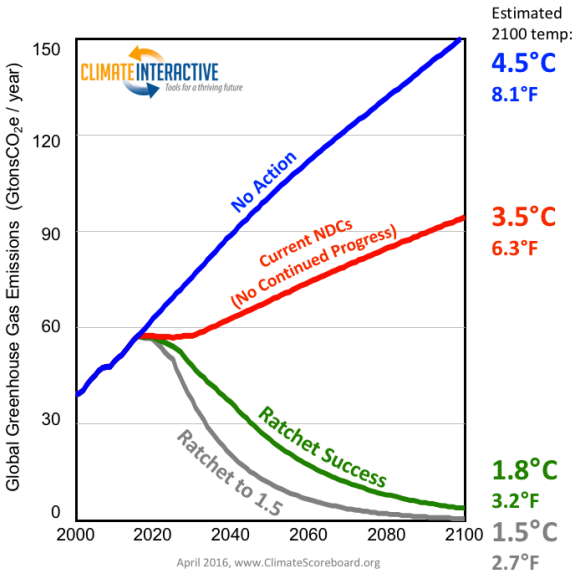
モロッコで開催中の COP22 は、日本時間 18 日(17 日)、全ての国・地域に地球温暖化対策の加速を求める「マラケシュ行動宣言」を発表し、対策の後戻りはできない。経済界や市民など全体の連帯を深める」とし、以前「パリ協定破棄」といったトランプ氏をけん制する内容となる。宣言文は 16 項目。①温暖化対策の国際的枠組み「パリ協定」が目標の今世紀末に温暖化ガスの排出を実質ゼロにすることに関し、参加国に「野心を高める行動を求める」と明記。②「2020 年よりも前の 2018 年に一層の対策と支援を全参加国に会議参加と実行を求める」。③今回アフリカ、島嶼国各国の強い意志で、歴史的な 48 か国が合意し「2050 年までに 100%再生エネルギー実施のコミットメント」を 18 日に声明した。

温室効果ガスのピークはパリ合意の前に 2030 年を最大期としたが、継続する温暖化で 2023-2025 年をと変え、その後 2020-2023 年までに実施必要と科学者たちが提言。ピーク期 2030 年とするなら 20-30%削減で困難、30-40%削減策が必要だ。日経新聞 18 日は「トランプ次期大統領がパリ協定離脱を示唆したことで、協定の実行は経済的にプラスに働く」等と記事があった。11 月 21 日迄の外務省等の温暖化対策の記事はない。モロッコの宣言採択実施 2 時間前に安倍首相はトランプ氏と会談していた。カナダは「ドイツ等に習え」と 2030 年に石炭火力発電停止を 21 日表明。日本は 10 年環境政策が遅れるだろう。

【インドネシア火災再発は大変な事態に！】

2015 年 8 月末からインドネシアでは大火災が発生し、14.5 億トンの CO2 が発生し 5000 人以上が被災した。経済的損失も大きく、世界銀行は「アブラヤシ企業の規模縮小が経済的負担は小」との報告書を発表した。多くのアブラヤシ企業の開発地や泥炭湿地と隣接するプランテーションからの火災も多かった。データでは、火災の 52%が泥炭湿地から発生し、鎮火困難の火災が広がった。とりわけ中カリマンタンでは首長選挙があり、自治体の鎮火への対応も遅すぎた。

タンジュン・プテイン公園だけでなくセバンガウ国立公園はもっと広い泥炭湿地であったため、公園の 1/3 近くが被害に遭ったという。たまたま火災に遭遇しなかったが、スンガイ・プトリ泥炭湿地林が燃えていたら、大変な事態になっただろう。オランウータン保護センターのパウリヌス君と同地を調査したが、私たちの計測で深い泥炭湿地は 10 mをこえた。FFI 調査報告書では約 57000ha に平均深さが7mで、400 万トンの CO2 があり、この地が火災に遭うと大変な CO2 を 1 か所から排出する。ここにオランウータンが 500 頭以上生息しており、85%残されているこのスンガイ・プトリ泥炭湿地の破壊を止めねばならない。一部伐採権を得たらしいが、3m以深の泥炭地開発は禁止なのだが、、。しかし地方自治として伐採権を与える行為も制限し、当分の開発を停止が必要だ。泥炭湿地保全が大きな温暖化保全に繋がるから。



イノさんのきまぐれ読書あんない

井下祥子

『里山資本主義』 ～日本経済は「安心」の原理で動く～

藻谷 浩介、NHK 広島取材班　KADOKAWA　2013 発行

藻谷浩介氏は、平成合併前の約 3,200 市町村のすべて、海外 59 ヶ国を踏破、多くの著述や講演を行う地方創生分野のキーパーソン。

日本は人口減少で大変！？　過疎地をどうする？　資源がない？
それを逆手にとった、マネー経済にたよらない問題解決。
森を活かしたペレット式ストーブに未来あり？
人口減少なら、土地を広く使おう。菜園用地付き住宅は完売！
「おいしい物を食べてゆったり暮らそう」という、元気の出る本だ。

『限界集落株式会社』『脱・限界集落株式会社』

黒野伸一著　小学館　2011, 2014 発行

「限界集落」、「市町村合併」、「食糧危機」、「ワーキングプア」、「格差社会」などなど日本に山積する様々な問題を一掃する、前代未聞!　逆転満塁ホームランの地域活性エンタテインメント!!(PR より)

第一作に続き、「脱・限界集落株式会社」もドラマ化。
東京の四分の一の家賃に惹かれて田舎ののシェアハウスに
転がり込んだイマドキの若者、健太。町は再開発にゆれるが…。

『ゾウの森とポテトチップス』 横塚　眞己人/写真・文　そうえん社

2012 発行 1,365 円

世界で３番目に大きな南の島・ボルネオ島のゾウたちの命があぶない

私たちが何気なく食べている、ポテトチップス、毎日つかっているシャンプーや洗剤‥
これらがゾウたちの命をおびやかしているってホント？

――熱帯雨林の森がへっているボルネオ島の真実と、わたしたちのくらしとのつながりを知る写真えほん。（本の帯より）

ウータン・森と生活を考える会の初期から事務局で活動してきてくれた辻村方孝（まさたか）氏が 54 歳で、突如 11 月 28 日に永眠されました。悲しみにくれます。彼なしにウータンはここまで存在しなかった。ウータンでは設立から熱帯材の大量輸入・使用問題を考え、初期の活動の「自治体キャンペーン」を引っ張る一人でありました。また、立ち上げた APEC-NGO ネットワークでは、APEC の合法的な林産物の取引問題について「問題だ」とコミットし、牽引する中心人物でした。一時は事務局長をお願いするかを迷った人材でした。大変残念です。こころからお悔やみ申し上げます。

2016 年 12 月　ウータン・森と生活を考える会代表　西岡良夫

World Forest News　世界の森林ニュース

2016 年 9 月～11 月　　by S.Kohsaki

【森林火災はイスラム法に反すると聖職者団体】

インドネシアのイスラム教最高指導者会議は人為的な森林火災はイスラム法に反する(haram)との決定を行った。林業環境大臣はこの宣言を歓迎しイスラム教説教師が全国の村々に広めることを期待するとした。[AFP 9 月 14 日]

【昨年の煙霧で 10 万人死亡との研究を政府が拒否】

昨年の煙霧が原因で 10 万 300 人が死亡したとの米国ハーバード大ほかの研究結果に対し，インドネシア，マレーシア，シンガポール各国政府は疑義を呈した。インドネシア政府は昨年の煙霧は 4300 万人に影響し 50 万人が呼吸器疾患を患い 24 人が死亡したとするが，この研究では控えめに見ても同国で 91600 人が早死にしたと推定。[AFP 9 月 19 日]

【ブラジル政府がアマゾンの森林減少率を上方修正】

アマゾン地域の森林減少率は 10 年前の 5 分の 1 程度に激減していたが，ブラジル政府は昨年の森林減少率の公式値を年間 6200 ㎢に 6%上方修正した。他機関の値でも昨年来の顕著な増加が指摘されている。[Mongabay 10 月 4 日]

【インドネシアのパーム油法案に WALHI が強く反対】

インドネシア政府が計画中のパーム油法案は，大統領による新規アブラヤシ農園不許可の方針に反し，環境や住民の土地買収への拒否権を犠牲にしてパーム油産業の拡大を支援する条項を含むとして WALHI(FoE インドネシア)が強く批判。[Jakarta Post 10 月 17 日]

【ミャンマーの違法チーク材がヨーロッパ市場に流通】

米国 NGO の EIA によれば EU5 か国 9 社で，EU 木材規制に違反したミャンマー産の違法伐採チーク材の取り扱い確認。これを輸入業者もミャンマー政府も黙認しているため，欧州市場で流通しているミャンマー産チーク材はすべて違法材であると考えられると。[Mongabay 10 月 19 日]

【ブラジル政府の森林監視は二次林が捕捉されず】

ブラジル政府は衛星画像を使った監視システム PRODES の導入により原生林の保護に近年大きな成果を挙げてきたが，二次林や乾燥地林の減少はモニターされておらず，2008～12 年に 6000 ㎢(大阪府の約 3 倍)の森林減少が捕捉されていないとの研究結果。[Mongabay 10 月 19 日]

【西カリマンタンで泥炭地の大規模破壊が計画中】

西カリマンタン州 Sungai Putri は広大な泥炭湿地林が広がり 1750 頭ものオランウータンの生息地であるが，この地区の周辺部で伐採権を持つ企業が植林プランテーションの準備段階として排水路を掘る作業を始めているとの情報。[Mongabay 10 月 24 日]

【伐採後の二次林も保全計画に含めるべきとの研究】

ボルネオ島の熱帯林での生物多様性や類人猿の密度は原生林と伐採後の二次林でほぼ等しいので，二次林も保全計画に含めるべきとの英国とマレーシアの研究者の結果。[Mongabay 10 月 26 日]

【ITTO が資金運用に失敗し深刻な財政危機に】

ITTO(国際熱帯木材機関)は前事務局長が日本などの出資した 1820 万ドルをオフショアファンドへ投資したが回収不能に陥り，一部のプロジェクが中止に追い込まれたことを年次報告書で明らかにした。[UN 10 月 31 日]

【昨年の煙霧で子どもを亡くした両親が裁判で証言】

インドネシアのジョコウィ大統領は昨年の森林火災と煙霧に関係した 15 企業の責任を追及すると公約したが，7 月にリアウ州警察はこれら企業の捜索を終了した。これに対し，不起訴の撤回を求める 2 件の市民訴訟で，煙霧で子どもを亡くした両親が証言を行った。[Mongabay 11 月 4 日]

【サバ州で熱帯で最も高い 94.1mの樹木を発見】

マレーシアサバ州 Danun Valley で高さ 94.1m，樹冠直径 40.3mのフタバガキ科の樹木をはじめ，樹高 90m以上の 49 本が発見された。[Mongabay 11 月 10 日]

【泥炭地保全は気候変動対策のカギを握る】

泥炭地は熱帯林の 100 倍の炭素を含み，世界の地中炭素の 30%が燃えると大量の CO_2 を排出するので，泥炭地保全は気候変動対策のカギを握る。[CIFOR 11 月 11 日]

【インドネシアが EU へ合法性認証木材を初輸出】

インドネシアは EU の違法伐採対策(FLEGT)で合法性が認証された木材の最初の輸出国となり，同国の木材合法性証明制度(SVLK)に適合する合板を積んだコンテナ船がジャカルタ港を出港した。[Mongabay 11 月 15 日]

【アフリカ諸国が油ヤシ開発から熱帯林を守る宣言】

COP22 の場で，熱帯アフリカ 7 ヶ国は持続可能でないアブラヤシ栽培の拡大から熱帯林を守るマラケシュ宣言を採択。これらの国々では今後急激なアブラヤシ栽培の拡大が見込まれており，この宣言はグローバルな官民パートナーシップ TFA2020 の一環。[Mongabay 11 月 16 日]

【ミャンマーの野生生物保護区で違法伐採が横行】

ミャンマーでは来年 3 月まで全国で全面伐採禁止措置が取られているが，北部カチン州の世界遺産や生物圏保護区に指定された Indawgyi 湖周辺では地元住民が賄賂を役人に渡し，燃料用木材の違法伐採が野放しの状態にあるとの調査結果。[Mongabay 11 月 16 日]

ウータン会員のページ（第 2 回）

ウータン・森と生活を考える会の会員には、いろいろなことで活躍されているかたがたくさんおられます。そのような会員のみなさんに、自己紹介・近況・入会の動機・期待・提案などを自由に書いていただくことにより、会員相互の交流を深め、今後の会の運営にも生かしていきたいと思います。書いてみたいというかたは、ウータン・森と生活を考える会にメールなどでご連絡下さい。（米澤）

橋本＠北海道さん

こんにちは。ウータンに顔を出すようになって約 5 年の橋本＠北海道です。
ウータンの魅力は行動力と粘り強さだと思っています。インドネシアをはじめ、各国の活動グループにネットワークを作り、現地で一番必要としていることを時間がかかってもやっていくのがウータンです。

そんな活動を約 30 年も続けているメンバーの心意気には尊敬します。(ちょっと勢い余っているところもありますが笑）メンバー同士が年代に関わらずフラットな関係で、やりたいことをある程度自由にできる雰囲気なのも特徴だと思います。そして、ウータンの長年の経験や蓄積された知識はすごい財産だと思います。これからは、その財産を棚卸していく作業も必要だと感じています。現在開催している学習会「ベテランに聞く」など、それぞれメンバーの頭の中にしかない知識を記録に残していって欲しいです。

ウータンの会議など慣れないとカオスな場ですが、それもそれで魅力の一つ(笑)。昔の会報誌など見ていると、しっかりしていた(?)時期とカオスだった様子が見えて、またおもしろいです。カオスに見えるのは自分の知識不足と思って勉強中です。これからも北の国から応援しています(^^)/

「リニア市民ネット・大阪」春日直樹さん　　近況報告とお願い

11 月 3 日、快晴。ウータンの現地見学に参加した 11 人は、不二製油の製油工場と巨大なパーム油貯蔵タンク群を見学した。西岡さん石崎さんの説明があった。経済優先の今日、熱帯の森が急激に失われている。森の減少で自然環境が劣化し、地域の伝統文化が失われ、野生生物の生存も脅かされている。アブラヤシ生産地に与える日本の影響力の大きさに複雑な心境である。

近況を報告します。リニア新幹線は大規模な環境破壊の元凶。リニア中央新幹線事業を白紙撤回させたい。其の想いから「リニア市民ネット・大阪」を昨年立ち上げた。リニア沿線で何が起きているのか。樫田さんの“悪夢の超特急”を読んで欲しい。名古屋開業が 2027 年。最速 500 ㌔をマスコミは伝える。JR 東海は自前で 10 兆円超える総事業費を調達する。国家的な大型事業を民間企業が行う。住民の事業への理解も得られない。至難の業だ。政府は 6 月に「リニア新幹線の名古屋～大阪間の開業を 2045 年から最速 8 年早め 2037 年になる」と表明した。国が資金融資を申し出た。2014 年 10 月に国が認可した事業を政府が覆すことになる。混乱を招く結果になる。
「リニア事業認可の取り消し」を国に求めた訴訟が始まりました。ストップリニア訴訟です。リニア裁判の日程は『第 2 回裁判 12 月 9 日（金）。第 3 回裁判 2 月 24 日（金）。第 4 回裁判 4 月 28 日（金）』。いずれも東京地裁で 14 時 30 分からです。リニア裁判の傍聴依頼と傍聴呼びかけをお願いします。

リニア図書、『増補版“悪夢の超特急”リニア中央新幹線』。2016 年 8 月発行。旬報社（定価 1600＋税）を紹介です。著者は樫田秀樹さん(ジャーナリスト)。リニア中央新幹線沿線では様々な問題が起きています。現地取材をもとに、ストップリニア訴訟の取り組みが紹介されています。書店で見かけること稀です。お勧めの本です。
（前作“悪夢の超特急”は第 58 回日本ジャーナリスト会議賞を受賞されています)。

森林火災と闘ってきている

インドネシア現地のメンバー、大阪に来る！

2月4日(土)15時半～17時半　メビック扇町(カンテレ扇町スクエア3F)**交流スペース2**

「インドネシアNGOが語る熱帯林の現状～森林破壊と村人の暮らし～」

来年のワンワールドフェスティバルでは、森林火災と闘っているＦＮＰＦ（インドネシアのＮＧＯ）のメンバーを招きセミナーを開催します。

2015年、インドネシアでは大規模森林火災により、関西エリアとほぼ同じ面積が焼失。ウータン・森と生活を考える会は、インドネシアの国立公園で森林再生を行う現地NGOと協働し、消火活動からその後の再植林、そして今後の火災対策といった取り組みを、地域住民を巻き込んで取り組んできました。火災の最前線で活躍したインドネシアNGOメンバーから現場のリアルな状況を聞き、そして参加者との意見交換を通してこれからの森林保全に関して一緒に考えたいと思います。

ワンワールドフェスティバルは、2月4日（土）と2月5日（日）10：00から17：00まで。ウータン・森と生活を考える会の展示は北区市民会館2階になる予定です。森林火災の写真の展示などをしますので、是非、お越し下さい。

総会は　2月25日(土)　13時30分より16時30分までです。

会場:大阪聖パウロ教会1階　（大阪市北区茶屋町2-30　Tel：06-6371-0170）

※引き続き「インドネシア森林火災寄付」募集中です。温暖化を防ぎ、様々な資源を私たちに届けてくれる貴重な森を守るため、力をお貸しいただければ幸いです。

振込先：ゆうちょ銀行　００９３０-４-３８８０　ウータン・モリトセイカツヲカンガエルカイ

※「インドネシア森林火災寄付」と用紙に記載してください。

※会計報告・森林火災カンパの報告は次号に回させていただきます。

※申し込み・問い合わせは、西岡（hutan.nishioka@docomo.ne.jp）

石崎（info@hutangroup.org 090-8145-1146）まで

（会費を頂いた方も含め、すべての方に振込用紙を同封しております。ご了承ください）